

## 1 教材名 「チーバくん、ふるさと・ことばかるた」

## 2 作成の意図

県教育委員会では、千葉県の道徳教育の主題『いのち』のつながりと輝き～大切なあなた、大切なみんな、大切な自然と地球、そして大切なわたし～のもとに、発達の段階に応じた道徳教育の充実を図るため、平成23年度、就学前児童の道徳教材「チーバくん、ふるさと・ことばかるた」とその指導資料を作成することとした。

幼児期は、遊びや周りとのコミュニケーションを通して、道徳性や語彙を身につけていく時期である。このような幼児の発達の段階を踏まえ、集団の中で「見る」「聞く」「話す」「触れる」といった活動を通じて、幅広い感覚に働きかけるかるた遊びは道徳性の芽生えと豊かな言葉、感性を育む上でも有効であり、何度も繰り返し活用できるという点からも教育効果の高い学習教材である。

「道徳教育推進のための基本的な方針」の中では、「ふれあう『いのち』」を就学前のテーマとし、重点的な学習内容として、「父母や祖父母とのふれあい」や「規則正しい生活」、「してよいことといけないことの判断」、「元気なあいさつ」、「正しい言葉遣い」、「お手伝い」といった具体的なねらいが示されている。

これらの道徳的ねらいを踏まえ、かるたの読み札や絵札の中に、家族や友達、動植物を慈しむ心、ルールやマナーを守る心、ふるさと意識の醸成などの道徳的要素や日本語特有のリズムや響きといった言語材料などの素材を盛り込んだ。

かるたの読み札、絵札は、千葉県内外からの応募作品の中から、「チーバくん、ふるさと・ことばかるた選定委員会」が厳正に選定したものである。また、各絵札には様々なポーズの「チーバくん」が登場し、子どもたちに親しみやすいものとなっている。

## 3 「チーバくん、ふるさと・ことばかるた」活用におけるねらい

- ① 日本語特有のリズムに親しませ、豊かな言葉・感性を育む。
- ② 郷土への愛着を感じ、ふるさと意識を醸成する。
- ③ あいさつやお手伝いなどの基本的な生活習慣の基礎を培う。
- ④ 家族、友達、動植物を慈しむ心を育てる。
- ⑤ ルールやマナーを守る心を育てる。

上記のねらいを踏まえ、幼稚園や保育所、幼児の実態に応じて、「チーバくん、ふるさと・ことばかるた」の効果的な活用の工夫を図っていくことが大切である。(p.18～p.23 参照)

また、文頭がカタカナで始まる札（「メッセ」、「モノレール」、「リサイクル」）の活用にあたっては、カタカナに対する興味や関心をもつためのよい機会であるとともに、このかるたの①のねらいにも迫れるという観点から、札の右上または左上の表記をカタカナとした。

#### 4 読み札、絵札応募数

読み札には、幼稚園301点、小学校5,588点、中学校1,386点、専門学校194点、一般621点、計8,090点の応募があり、絵札には、特別支援学校8点、小学校279点、中学校456点、高等学校207点、一般135点、計1,085点の応募があった。

これら数多くの応募作品の中から、選定委員会において、読み札、絵札各44枚を決定した。

#### 5 参考

##### ◆沖ノ島（おきのしま）

館山湾の南端に位置している島で、南房総国定公園に含まれる。以前は、500m沖合いにあった島だが、関東大震災による隆起などで、現在は陸続きになっている。島の周囲は1km程度の小さな島だが、岩場と砂浜が混在し、釣りが楽しめる。北岸の水深2m以深からは世界最北地域のサンゴの観察も可能である。（「一般社団法人 館山市観光協会ホームページ」より）

##### ◆伊能忠敬（いのうただたか）

江戸時代、日本国中を測量してまわり、初めて実測による日本地図を完成させた人である。忠敬は、延享2年（1745年）現在の千葉県九十九里町で生まれ、横芝光町で青年時代を過ごし、17歳で伊能家当主となり、佐原で家業のほか村のため名主や村方後見として活躍した。

その後、家督を譲り隠居して勘解由と名乗り、50歳で江戸に出て、55歳から71歳まで10回にわたり測量を行った。その結果完成した地図は、極めて精度の高いもので、ヨーロッパにおいて高く評価され、明治以降国内の基本図の一翼を担った。

（「伊能忠敬記念館ホームページ」より）

##### ◆大賀ハス（おおがハス）

昭和26年に、大賀一郎博士が、千葉市内の検見川（現在の東京大学総合運動場）にて発掘し、その後、発芽・生長・開花させた、推定2,000年前の古代ロマンを秘めた美しい花である。昭和29年に千葉県の天然記念物に指定され、平成5年に千葉市の花に制定された。

（「千葉市ホームページ」より）



絵札選定委員会の様子